

徐禎卿の「楽府」について

著者	鷺野 正明
雑誌名	中国文化：研究と教育：漢文学会会報
巻	40
ページ	12-23
発行年	1982-06-26
URL	http://doi.org/10.15068/00149366

徐禎卿の「樂府」について

鷺野正明

一 はじめに

中国文学の長い歴史のなかで、あまり興味を持たれないのが明代の詩文である。その中でも特に「古文辞派」は、領袖格の数名以外は完全な詩文集さえも残らないほど忘れ去られた存在となっている。

「古文辞派」は、たとえば、そのスローガンとした「文は秦漢、詩は盛唐」の言語面での模倣に終始し、特に詩は多様化する現実や自己の生活体験に即した新たな文学を創造し得なかつた、とされる。このように、これを「派」として論じることがはたやすいにしても、しかし、明代文壇の派閥性・排他性のなかで、不評のまま埋没した作家もあつるいはいるかもしれない。抑々一人の人間の生と文学との関わりを、後世の文学観や価値観によって一蹴してしまうのはあまりにも不遜なことではないのか。本稿はこうした反省のもとに、「前七子」の一人徐禎卿（字昌穀、又昌国、

号楚功。一四七九—一五二一）について考えてみるものがある。

なお使用するテキストは、徐禎卿が北京に於て自選した『徐楚功集』(六卷)である。

二 徐禎卿をめぐる評価

文震孟(一五七四—一六三六)は、万曆(一五七三—一六二〇)の頃の徐禎卿の評価について、次の様に述べている。

文成(王陽明、一四七二—一五二八)強いて以て吾が徒と為し、北地の弇州(王世貞、一五二六—一五九〇)援きて以て吾が党と為し、而して五金八石冲拳の倫、又引きて以て吾が儕と為す。(『姑蘇名賢小記』)

弇州山人王世貞は、江蘇省太倉の出身で、「北地」の人ではない。文震孟がこの文を書いた頃はすでに、北京文壇を中心に推進された古文辞の理論が批判の対象にされ、徐

禎卿は王世貞の「党」の一員と見做されていたのである。王世貞は、李夢陽（一四七二—一五二九）をより高く評価し、そのため、江南出身の徐禎卿が北京へ出て進士となり（弘治十八年、一五〇五）、李夢陽に見えるとそれまでの詩風を悔い改めた、と次の様にいつている。

昌穀少きより即ち摛詞し、文は齊梁を匠とし、詩は晚季に沿う。進士に挙げらるるに迫り、猷吉に見えて始めて大いに悔い改む。其の染府・選体・歌行・絶句は、六朝の精旨を咀し、唐初の妙則を採り、天才高朗、英英として独り照る。律体は微かに整栗に乖くも、亦浩然として太白の遺なり。（『藝苑卮言』巻六）

「悔い改め」が文震孟の王世貞批判になったのである。が、派閥性は「前七子」ではなく、「後七子」から次第に顕著になったことを考えると、後世の文学論争に徐禎卿が巻き込まれたとも言えるのである。錢謙益（一五八二—一六六四）の次の文は、反古文辞の趨勢の中での徐禎卿批判を示しているよう。

登第の後、北地の李猷吉と遊び、その少作を悔い、改めて漢魏盛唐に趨く。吳中の名士、頗る邯鄲学歩の詭り有り。（『列朝詩集』丙集第九小伝）

こうした状況下で、勝手な梓付けや派閥にとらわれず、

徐禎卿の詩文そのものに迫れ、と文震孟は指摘したのであるが、彼自身どのように徐禎卿を評価していたのかは明らかにできない。しかし、当時は古文辞派の所謂格調説以外に、次の評価がすでに提出されていた。

徐（禎卿）は能く高韻を以て勝り、蟬蛻軒拳の風あり。高（叔嗣、一五〇一—一五三七）は能く深情を以て勝り、秋閨怨婦の態あり。更に千百年、李（夢陽）何（景明、一四八三—一五二一）は尚お龐興あるも、二君は必ず響を絶つこと無けん（『藝圃擷餘』）

王世懋（一五三六—一五八八）の『藝圃擷餘』は「神韻」を重視している。そのため清の王士禎（一六三四—一七一）は、徐禎卿等を「古澹」の一派とし、徐・高の不朽を論じた王世懋の見識の高さを讃え、また一方で『迪功集選』（一卷）を編んだ。王世懋の予言は適中した訳であるが、古文辞を徹底的に批判した錢謙益も、先の引用に続けて、

而れども標格清好、摛詞婉約、絶だ中原の儉父の槎牙冪兀の習に染らず。江左の風流、故より自ら存るなり。（『列朝詩集』）

と、清らかで平淡な詩風を高く評価している。

以上のような評価を見ると、「古文辞派」「前七子」という文学史の常識は、徐禎卿には不要ではないのか、ときえ

思われるのである。いずれにせよ、文震孟の指摘するように、詩文そのものを研究しなければならないのであるが、その手掛りとして、文体別に検討を加えるか、また徐禎卿自選の『徐勉功集』が分類本の型式をとっているので、内容別に、あるいは巻ごとに検討するか、様々な方法が考えられよう。その意味で、王世貞が文体別に評論し、絶賛した楽府・選体・歌行（勿論その中に絶句形式も含まれている）が、巻一に「楽府五十首」として収められていることは注目に値しよう。

李夢陽・何景明の全集の巻一は賦が収められ、また特に李夢陽の賦は官場に於ける自らの境遇を屈原に置きかえて制作した李夢陽独自の文学であるという指摘があることからも、巻一の「楽府」は徐禎卿の北京文壇に於ける独自性を探るうえで極めて重要なものと言えるであろう。

三 徐禎卿の楽府観

徐禎卿は進士及第後、李夢陽の求めに応じて会見した。その時二人は、古代の詩歌を理想とすることで一致はしたが、文学の理解の仕方や嗜好で異なる点があった。徐禎卿はそれを李夢陽に理解してもらえなかったと思ひ、後に使者を遣わして皮日休・陸龜蒙らが次韻し合ったような交際をしたと申し出た。李夢陽は、徐禎卿が中晩唐の詩を善しとす

ることに驚いて次の様な手紙を書いている。

僕竊かに謂えらく、足下過れりと。夫れ詩は志を宣べて和を道くものなり。故に宛を貴び峻を貴ばず、質を貴び靡を貴ばず、情を貴び繁を貴ばず、融治を貴び工巧を貴ばず。故に曰く、その樂を聞いてその徳を知る、と。故に音なる者は愚智の大防、莊諛・簡侈・浮孚の界分かる。元（稔）白（居易）韓（愈）孟（効）皮（日休）陸（龜蒙）の徒に至り、詩を為るに始めて聯を連ね押を闘わし、疊疊として数千百言なるも相下らず。此れ何ぞ市に入りて金を攫み、登場して角戯するに異ならん。三代より下は、漢魏最も古に近し。郷使繁巧峻靡の習、誠に情質宛治より貴くして、莊諛簡侈浮孚、意義殊に大なる高下なくんば、漢魏の諸子、先ず之を為さざらんや。『空同先生集』卷六十一「與徐氏論文書」

李夢陽は、古代に続く漢魏を典型に選び、その詩の宛（まろやかなリズム）質（素材）情（純粹な感情）融治（技巧的でなく、全体のバランスのとれたやわらかさ）を貴んでいた。

それに対して徐禎卿はそれへの返書の中で、自分は李夢陽のように、いわば「格調」の面からは文学を考えていな

いことを言う。

且つ文辭の貴賤は、その人に存す。……其の必ず道德の裏に本づき、作者の度に遵い、綵繭襜衣を以て物を生ずるのみ。(卷六「與李獻吉論文書」)

と。彼は、文学はあくまでも作者の人間性にあると考へ、当時の文壇が「蟬口の鼓譟」するように、いたずらに漢魏の詩の形式を典型としながらその内奥を十分理解していないことに反撥する。ただ李夢陽のいう「漢魏」に対しては次の様に論じている。

唯だ漢氏のみ古に逾ゆること遠からず。遺風流韻、猶お未だ艾きず。而して郊廟閭巷の歌、誦すべきもの多し。僕以為らく、是くの如きは猶お古に叛かざるべし。乃ち其の性情の愚を攄べ、竊かに作者の義に比す。

(同)

徐禎卿は、詩理を論じた『談藝錄』に於ても「魏詩は門戸なり。漢詩は堂奥なり」といい、夢陽の言う「漢魏」を学ぶこと自体は、必ずしも斥けてはいない。また同じ『談藝錄』で「情は心の精なり」として、情を詩の根底に据えているが、この手紙で「郊廟閭巷の歌」つまり楽府を重視しているのも、「性情の愚」が抒べられているからであり、またそれ故、詩を作る際には技巧など考へず、古の作者の

ように「性情」を抒べよ、というのである。徐禎卿が皮日休や陸龜蒙を引き合いに出したのは友情を抒べ合ひ一方法としてであり、李夢陽が皮陸らを批判した「聯を連ねて押を闘わし」たことなど考へていなかったのである。

それにしても、徐禎卿が「性情の愚を攄べ」る文学として漢の郊廟閭巷の歌に共鳴したのは何故だったのだろうか。これは、自選集の巻一に「楽府」を配置したことと大いに関係がある。

手紙の「攄其性情之愚、竊比作者之義」は、例えば『論語』述而篇の「述而不作、信而好古。竊比於我老彭」の包威の注に「我若老彭但述之耳」と云うように、古の作者が「其の性情の愚を攄べ」たようにただ「性情」を攄べるだけだ、ということであろう。しかし、古代の楽府が庶民の真情を抒べたものであることによって、「諷諭」即ち社会批判の機能をも期待されるものであったことを考へると、「作者之義」と徐禎卿が表現したうらには、楽府の政治社会への積極的な役割をみていたとも考へられるのである。

四 官界での楽府制作

弘治十八年(一五〇五)三月、徐禎卿は進士に及第したが、容貌が醜いという理由で翰林院の選に入ることができ

なかつた。⁽⁸⁾五月、孝宗が崩御し、武宗正徳帝が即位した。

「樂舞歌辭」は、「玄瑟を鼓し鳳簧を吹く 八音翕合して鏘鏘たり 坐する者疲れを忘れ 聴く者哀しみて以て傷むも 且つ樂を為し万年を寿く」、「生きて盛世に逢い 聖祚長し」「陛下黃耆福履無疆」というように、孝宗を哀悼しつつ武宗の即位を祝福している。

やはり五月のことであるが、孝宗の喪に乗じて寇が侵入し、楡台で戦争が起つた。徐禎卿は「楡臺行」を作り、戦争の悲惨さを次の様に歌っている。

楡臺高

以臨匈奴

匈奴桀

罪當夷

戰不利

師被圍

師被圍

士無糧

渴無漿

拔劍仰天訣

壯士餓死亡

棄戸不保

楡台高し

以て匈奴に臨む

匈奴桀たり

罪 当に夷ぐべし

戦い利あらず

師 囲まれる

師 囲まれて

士 糧なし

渴して漿なし

剣を抜き天を仰ぎて訣れ

壯士 餓えて死亡す

棄戸 保たれず

蹂藉道傍

嗟爾從軍之人

行不來歸

奈之何

心傷悲

初め諸將李穡・白玉・張雄・王鎮・穆榮は、

の命によって、各々三千人の兵を率いて要害を抑えていた

が、寇が急遽新開口から襲撃してきたため、すべて楡台で

包囲されてしまった。部下が敵に囲まれたという報に接し

た張俊は、三千人の兵を率いて救援に向かったが途中で足

に怪我をし、都指揮曹泰に兵を属したところ、泰も鹿角山

で包囲されてしまった。そこで張俊は怪我にもかかわらず

五千人の兵を調べ、三日分の食糧を持って馳せつけ、まず

泰を、そして兵を分けて穡・玉らを救った。しかし雄と榮

は戦死し、包囲から逃れた軍も追撃を受けて多数の死者を

出したのであった。⁽⁹⁾

李夢陽にも同題の作品があるので比較してみよう。

楡臺高

看 看日落

有河

或兩存

道傍に蹂藉さる

嗟爾 軍に従う人

行きて來歸せず

之を奈何せん

心傷悲するを

高風吹

樹梢都搖搖

臺下黃羊走

黃嵩山頭

看 軍中白旗

身姓誰向前

看 力能拔虎尾

人虎

(榆台高し 高風吹く 樹梢都て揺揺 台下黄羊走る
黄嵩山頭に看る 日の落つるを看る 鬻築四面に吹く
軍中の白旗 身姓誰か前に向わん 河有るを看る 河
水深し 彼死を怕れず 我も亦人 力能く虎尾を抜く
人虎或いは両存 帰りに鬼雄と為り 爾が魂を榮とす
『空同先生集』卷六)

徐禎卿は、包囲されて餓死する兵士に焦点を当て、高揚した感情を吐露していたが、李夢陽は、修辭に意を用いて
いるだけである。

この榆台の戦争によって、徐禎卿は、戦争と食糧不足の
ない理想社会の実現を武宗の政治に期待するようになって
た。「闖闖行」の後半では、政治の刷新を皇帝に進言して
いる。

郡縣吏愛農 郡県の吏 農を愛し

徭賦臺稼穡穰 徭賦台 稼穡穰かなり

兵訟以息 兵訟こゝ以こゝに息やみ

民無天凶 民に天凶なし

黄河水清 黄河 水清み

出龜龍 龜龍を出だす

願我皇帝 願わくは我が皇帝

壽與天侔 寿 天と侔しく

無終窮 終わり窮まることなからん

徐禎卿は、進士及第から翌正徳元年(一五〇六)二月ま
でのほぼ一年間「帝座の側に浮沈し 人の歳星を知るなし
側ら公車に侍して歡ぶ所なし」という生活を送っていた。
そのため自然に皇帝へ働きかける作品が作られたのであ
る。その他巻一で皇帝を寿祝するものに「白紵歌四首」が
ある。恩愛深い宮女の華やかな生活を一・二首で描き、第
三首目では「百年の會忽ち須臾 東流の水西飛の鳥 今我
樂しまざれば何をか為さんや」と歌い、第四首の最後が
「皇帝陛下壽萬年」で終わるものである。「楽しい哉今日
の宴、四座俱に萬年」で終わる「鶴雀行」は、武帝の豪放
華麗な生活を描いているように思われる。

徐禎卿は、正徳元年(一五〇六)二月、職に就けないま
ま旅に出、江南・湖南・湖北・四川・巫山を経て、十一月
前後に北京に戻り、その後大理左寺副を授けられた。「玄
會曲」で盛世を讚美した後「白獸の客に非ざるを慚じ 虚
しく象魏の言を承く」といっているのは、授官のことを言
っているであろう。この重刑者の再審を掌る職にいた時
の作に「猛虎行」がある。長編なので後半を引用してみよ
う。

嬌女行採桑

嬌女行きて桑を採む

道逢野虎搏食之

道に野虎の搏えて之を食うに逢う

倉浪之天更不慈

倉浪の天更に慈しません

猛虎瞑目若搖思

猛虎瞑目すること思を揺むる若し

便復舍我置道傍

便ち復た我を捨てて道の傍に置く

我欲東歸河無梁

我東帰せんと欲するも河に梁なし

綿綿邈邈思我故鄉

綿綿邈邈として我が故郷を思ふ

嗟爾行路人

嗟爾 路を行く人

猛虎當關慎真行

猛虎 関に當る 慎んで行くこと

思我父母多苦辛

我が父母の苦辛多きを思え

吁嗟猛虎

吁嗟猛虎

白額狸斑而黑文

白額 狸斑して文を黒む

何不渡河而去

何ぞ河を渡って去らざる

從彼豺狼群

彼の豺狼の群を従え

城中咆哮竟夕聞

城中に咆哮して竟夕聞こえしむ

吾將訴汝於泰山君

吾將に汝を泰山の君に訴えんとす

猛虎行且莫歌

猛虎行きて且つ歌う莫かれ

泰山之君奈何若

泰山の君 若を奈何せん

武宗は逸楽を好み、劉瑾を筆頭とする宦官「八虎」を側近にして商人の真似ごとをしたり、宮廷を抜け出て微行を樂しんだり、豹房新寺を建ててこもったりした奇人で、政

治には無関心だった。そのため「八虎」は政權を擅にし、引用一行目から四行目のように、猛虎（劉瑾）は天の慈悲がないかのように悪政の限りを尽くし、また十二目目のように、無実の訴えを無視して人を勝手に罪に陥れていた。そうした状況下で、大理左寺副の徐禎卿は、引用五目目のように職權を無視され、また六・七目目のように帰郷を切望していたのである。十四目目の「豺狼群」は「八虎」とその一派を、十六目目の「泰山君」は皇帝を指す。「吾將訴汝於泰山君」と言った徐禎卿は、皇帝自らが身を正し、且つ八虎を追放することを諷諫する「崇化論」（卷六）を書いている。

以上見てきたように徐禎卿の作品は、「檄臺行」は別としても、徐禎卿の官人としての真情が吐露され、皇帝への積極的な働きかけがみられた。しかし、実際に官に就いた時に作られた「猛虎行」が、真情はあっても比喩的な表現になっていたことは注意しなければならない。「猛虎行」を書いた正徳元年（一五〇六）の十二月頃、徐禎卿は無頼漢と交際して囚人を逃し國子博士に貶せられているが、それ以降の作と考えられるものは一層暗示性が強まっているからである。

五 抒情と暗喩

二十二篇五十首の「楽府」を収める巻一の中に、妻の代作をした二篇がある。「江南楽」は八首の、「隴頭流水歌」は三首の連作になっていて、妻の「性情の愚」が抒べられ、「作者（徐楨卿）の義」が秘かに託されている。

「江南楽」は五言絶句である。

生長在江南 生長して江南に在り

不愛江北住 愛せず 江北の住

家在閩門西 家は閩門の西に在り

門垂雙柳樹 門には垂る 双柳樹（其一）

陽春二月時 陽春二月の時

桃李花參差 桃李 花參差

寄言諸姊妹 言を寄す諸姉妹に

莫遣惡風吹 惡風をして吹かしむる莫かれと（其二）

還鄉信自樂 郷に還る 信に自ら樂し

望近轉於邑 望む 邑に近く轉ずるを

阿母見兒歸 阿母 兒の帰るを見れば

定自持儂泣 定めて自ら儂おれを持って泣かん（其三）

第一首は、江南の生まれだからというだけで江北を愛せない具体的な理由は示されず、心はすぐに故郷へと馳せ、

第二首は、二月の桃李の花と姉妹を想い、第三首は、帰郷した際の母を想像している。心に想起されるままに、江南の景色から家族へ、そしてその動作へとより詳細に描写されている。しかし第四首では、我に帰るかののように、何故江南が恋しいのか自答している。第三首の「母」を承け、本能であるという。

野鳧生雛時 野鳧雛を生む時

乃在河沚中 乃ち河沚の中に在り

可憐生羽翼 憐むべし 羽翼を生じ

各自戀孤叢 各々自ら孤叢を恋うを（其四）

橘生江上州 橘 江上の州に生ず

過江化爲枳 江を過りて化して枳と爲る

情性本非殊 情性 本殊なるに非ず

風土不相似 風土 相似ざるなり（其五）

第四首でいわば弁解めいたことを言うのは、逆に江北での生活がどのようなものであるかを想像させることになる。そこで第五首では、風土が違うのだ、と江北を愛せない理由をより具体化している。風土の違いは、次の第六首で明らかにされる。

人言江南薄 人は言う 江南は薄なりと

江南信自樂 江南 信に自ら樂し

采桑作蠶絲 桑を采り 蚕糸を作り

羅綺任儂著 羅綺 儂に任せて著る (其六)

與郎計水程 郎と水程を計る

三月定到家 三月定めて家に到らん

庭中赤芍藥 庭中の赤芍藥

爛熳齊作花 爛熳 齊しく花と作らん (其七)

第六首で、江南は薄俗であると人の言うのを引いて、江南の自由でのびやかな様子を描くのは、逆に江北の素朴さと不自由さと言うのである。二句目は第三首の「還鄉信自樂」と呼応し、そのため第七首では、帰郷の具体的な計画を立て、家の様子を再び想像している。江南を懐しむ理由を述べたり(其四)、江北を厭う風土の違いを考えたり(其五)、人の中傷を却けて(其六)、郷愁は一気に昇りつめたのであるが、結局第八首ではそれが打ち砕かれてしま

う。

江南道里長 江南の道里長し

荆襄在何處 荆襄 何処にか在る

聞郎昨夜語 郎に聞く昨夜の語

五月瀟湘去 五月 瀟湘に去くと (其八)

「瀟湘去」が単なる旅行ならば、それを取り止めてでも懐しい江南へ帰ることができる筈であるが、それができないのは官に就いていることを示し、「瀟湘」の語とともに政界での齟齬が暗示されるのである。徐禎卿が郷愁を強めるのは、嫌悪すべき政治的な背景があり、そこから逃れられないという前提があったのである。

次に「隴頭流水歌」を見てみよう。

隴水鳴咽流 隴水 鳴咽して流る

各自東西下 各々自ら東西に下る

生男不下堂 男を生むも下堂せしめず

生女棄中野 女を生んで中野に棄つ (其一)

下隴磨剪刀 隴に下り 剪刀を磨く

刀澁指爪柔 刀澁く 指爪柔かなり

將刀斷割水 刀を將って水を断割するも

那用東西流 那用せん 東西に流るるを (其二)

隴水鳴不止 隴水 鳴りて止まず

似聞阿兒語 阿兒の語を聞くに似たり

出門不見人 門を出でて人を見ず

肝腸斷絶汝 肝腸 汝に断絶す (其三)

「江南樂」同様物語性がある。水の流れ（「悲哀」）は東西へ絶えず流れ（其一）、それを断ち切ろうとするが結局は無駄で（其二）、鳴り止まない水の音で亡き児を思い出して肝腸断絶している（其三）。

隴頭流水歌は、行人の故郷への思いを水に託して歌うものであるが、ここでは夭逝した男児や、野に棄てた女児への絶ち切り難い母親の情として表現されている。第一首目の「生男不下堂 生女棄中野」という状態が何故生じたのかは詩中で敢えて言わないが、食料不足と戦争のためであることは容易に想像できるのである。「榆塞行」「闔闔行」で示された徐禎卿の主張は、妻の真情吐露のかたちをとって表現されているのである。徐禎卿は、妻高氏との間に子どもがいたかどうか、またいたとしてもその子が夭逝したかどうか明らかでないが、当時の貧しい民衆の心を代弁しているとも考えられよう。

何景明にも「隴頭流水歌三疊」がある。これは「送劉遠夫行」と記されており、劉遠夫の故郷を思う気持と何景明の劉を思う気持が表現されているが、徐禎卿の抒情には遠く及ばない。三首の連作としての緊密さも社会の暗示もそれほどない。

我欲望長安 隴阪高蔽天 隴阪高可陟 隴水鳴澗澗

（我長安を望まんを欲するも 隴阪高くして天を蔽る

隴阪高きも陟るべし 隴水鳴りて澗澗）

盤盤上隴車 斑斑下坂馬 我非虎與兕 使我行曠野

（盤盤、隴を上る車 斑斑、坂を下る馬 我は虎と兕

とに非ず 我をして曠野へ行かしむ）

長安有高樓 不見隴西州 可憐隴頭水 日夜東北流

（長安に高樓あり 見えず隴西の州 憐むべし隴頭の水 日夜東北に流るるを 『大復集』卷六）

六 結語

政権を専断していた劉瑾は、正徳五年（一五一〇）八月失脚した。徐禎卿はその事件をテーマに「雜謡四首」を作っている。

夫爲虜 夫は虜と為り

妻爲囚 妻は囚と為る

少婦出門走 少婦 門を出でて走り

道逢爺孃不敢收 道に爺孃に逢うも敢えて収めず

東市街 東市街

西市街 西市街

黃符下 黃符下り

使者來 使者來る

狗棘棘 狗 棘棘

鶏鳴飛上屋 鶏鳴き 飛んで屋に上り

風吹門前草蕭蕭 風吹き 門前 草蕭蕭（其一）

劉瑾は逮捕され、一味の者は辺境に追放されたり罷免されたりした。婦女は浣衣局に送られた。しかしここで注意すべきことは、たとえば第三首目で「狐彭彭 兔逐逐 反顧して奔り以て北ぐ 彎弓來る 彎弓來る」と「八虎」の奔走する様が描かれてはいても、第一首に於ては犠牲になった人々の不安や恐怖を描いていることである。卷一「樂府」の詩風はこれまで見てきたように、官界での境遇によって変化していたが、根底となる「性情の愚」は、「榆臺行」にしる「猛虎行」にしる、弱い立場の人々への同情であった。結局それは、

凡そ厥の含生、情本一貫す。同に憂うれば相瘁れ、同に樂しめば相傾く所以の者なり。（『談藝錄』）

ともいっているように、自身の官場での不遇や挫折に起因しているのである。

既に第三節で述べたように、徐禎卿の北京文壇での独自性は、この抒情にあったのであるが、「樂府」を重視し、また卷一に配置したのは、弱い人間の一人として社会を批判する最良の手段であると考えていたからであった。このことは卷一の構成を見ることによって明らかになる。

① 樂舞歌辭 皇帝即位の喜び（弘治十八年）

② 闔闔行 皇帝への進言

③ 遊俠篇 英雄が天下の平和を齎す

④ 猛虎行 八虎の虐政（正徳元年）

⑤ 苦寒行 遊子の嘆き

⑥ 榆臺行 榆臺での戦争（弘治十八年）

⑦ 白紵歌四首 宮女の華やかな生活

⑧ 步出夏門行 仙界への飛昇

⑨ 鶴雀行 遊俠と酒宴

⑩ 玄會曲 盛世賛美と授官

⑪ 將進酒 北京文壇での独歩

⑫ 江南樂八首代内作

⑬ 隴頭流水歌三疊代内作

⑭ 王昭君 ⑮ 從軍行五首 ⑯ 結客少年場行 ⑰ 少年

行 ⑱ 平陵東行 ⑲ 長安曲 ⑳ 燕京四時歌 ㉑ 擬古

宮詞七首

⑳ 雜語四首 八虎失脚（正徳五年）

卷一は、⑪の「將進酒」を界にして大きく二つに分けられる。前半は宮庭や政治の場に於ける一家家として作られた作品が多いのに対し、後半は、より民衆の立場で、またより樂府題に忠実に制作したと思われる作品が多い。後半

が、⑫⑬の妻の代作から始まっていることも注意されてよい。作品の配列は制作年の順ではなく、①と②、③と④がそれぞれ対になっていて、①②と③④が君と臣の關係になっている。そして④から⑫までは、八虎專政の中に抱括されるかたちになっている。⑤は、⑥⑦⑧までの期間、頂度徐禎卿が進士に及第した年から八虎失脚までの自らの生活状態を総括し、⑨は暗黒政治の終焉を告げ、①と対応している。①②③④は巻一の序、⑥⑦⑧は進士及第から大理左寺副になるまで、⑨⑩⑪は大理左寺副から八虎失脚まで、と分けることができるのである。

いづれにせよ、自選集巻一「樂府」は、皇帝への信頼と、八虎の悪政批判とを託したものと云えるのである。

徐禎卿の「政界」での文学活動は、八虎失脚とともに終わった。この頃であろうか、徐禎卿は道教に心を傾け、益々世俗と淡泊になり、必ず長生できるとまで悟ったとい⁽¹³⁾う。幼少から病弱であったためでもあろうが、後、十月、入観のため上京した王陽明の講学に参加、翌正徳六年（一五〇六）三月、三十三歳で卒した。

注

- 1) 吉川幸次郎『元明詩概説』第六章第六節「古文辞」の功罪。

(2) 静嘉堂文庫所蔵。

(3) 王世貞『藝苑卮言』卷六に云う、「今中原豪傑、…摘瑕攻類、以模剽病李（夢陽）、不知李才大固苞何（景明）孕徐（禎卿）、不掩瑜也」。

(4) 郭紹虞『中國文学批評史』第三章第三目「王世懋與胡應麟」。

(5) 王士禎『池北偶談』卷二十。

(6) 『空同先生集』は卷一〜三に三十五篇、『大復集』は卷一〜二に二十二篇、『徐迪功集』は卷五に十篇、それぞれ賦が収められている。

(7) 橋本堯氏「倒立の構図―李夢陽と古文辞の原点」（島根大学法文学部紀要、文学科編第3号―I）

(8) 『明史』卷二百八十六「文苑傳」。

(9) 『明通鑑』卷四十。

(10) 卷三「唐生將卜築桃花之塢謀家無貲貽書見讓寄此解嘲」。

(11) 出發の期日と旅行先は、卷六「重與獻吉書」に詳しい。旅行期間は、江兆申氏の推定に依る。『關於唐寅的研究』（国立故宮博物院印行）二十九頁。

(12) 『弘治十八年進士登科錄』に「娶高氏」と記されている。

(13) 『王文成公全書』卷二十五「徐昌國墓誌」。